

高退協ニュースをホームページで見ましょ

大川法由記

高退協ニュースは1979年6月に第1号を発行し、42年目の今年11月で233号となりました。

現在は発送と同時に高退協のホームページにも掲載しておりますので、お手元に無く印刷の高退協ニュースと併せてカラーの高退協ニュースがホームページで見ることが出来ます。今回、pdf形式も併用しましたので拡大しても字がぼやけずとも見やすくなりました。しかも1979年の第1号から現在の233号まですべて見ることが出来ます(一部欠けている号があります。現物をお持ちでしたらぜひご連絡ください)。過去の高退協ニュースをじっくり見ていくと、とても楽しい時間を過ごすことができます。

○高退協ニュースをホームページで見ると
①まずインターネットを

第1号(1979年)から現在まで42年間の高退協ニュースを掲載

232号2021年9月7日発行



news232.pdf
文字部分を
クリック

開き「高知高退協」で検索してください。
「高知高退協ホームページ」が出来たらそこをクリックすると高退協のホームページが現れます。上部に横長の緑色の背景で各項目が並んでおりますので、その中から高退協ニュースにカーソルをあててクリックしてください。最新の高退協ニュースが現れます。その下には新しいものから以前ののものまで(第一号まで)さかのぼって見ることが出来ます。見たい号を表示します。

左図は今年9月発行の232号2面の縮小版(サムネイル)です。下に文字でnews232.pdf(232号の2面)があります。これにカーソルをあててクリックすると232号2面が現れます。そのままでは小さくて見づらいときは拡大してご覧になってください。拡大率は200%ぐらいまで見やすいところで見て

補聴器物語

坪井幹之

98号(1999年)

いつの頃からか耳が遠くなった。数年前、近所の耳鼻科で診てもらったところ、老人性難聴で治療の方法はない、日常生活に差支えがあれば補聴器をとの診断であった。

以後、月日が経つのもにもままです聞えなくなってきました。会議でも人の話は半分聞き取れればいい方、テレビのドラマでは早口、高音の台詞がわからない。いよいよ補聴器のご厄介になるしかないと言った。決心を決めたが、なかなか踏み切りがつかない。やがて三月三日がきた。「ミミの日記」である。これが契機と再診に出かけた。検査の結果は両耳とも難聴が進行しているとのこと、補聴器専門店の紹介状をもらった。

早速、高知駅前のお店へ。妙齢の女性にこやかに応接してくれた。まずは聞き取りの検査。小さい音では「ヤオヤ」といった言葉が聞き取れなかった。次に補聴器の試聴となる。説明の冒頭に補聴器

ください。ニュースの縮小版(サムネイル)の部分はクリックしても拡大すると字がぼやけて判別しづらくなります。なお、過去のニュースには「28号(1986年1月 新年のご挨拶)」のように号数と主題が書かれてありますのでそこにカーソルを当ててクリックすると見ることが出来ます。資料がなく欠けた号もありますので、もしお手元に欠けた号をお持ちの方がおられましたら高知組書記局088(822)6822までご連絡ください。よろしくお願ひします。

昔の高退協ニュース、ス、じつじつと読むと楽しいわよ

42年間の高退協ニュースをご覧になるとわかりますが、当時の会員の楽しい交流、鋭い問題提起、力強い団結など、当時の雰囲気そのまますべて起きます。是非、読んでみてください。最後に、当時に掲載された叶岡哲さん(1987年32号)、坪井幹之さん(1999年98号)のエッセイを再掲載します。お二人とは治療器具ではない、超小型のマイクであるとの託宣。それで保険がきかないのか。機種は耳穴型と耳掛型の二種でそれぞれ大型、小型、全自動と多種多様である。値段もウン万円からウン十万円までいく段にも分かれる。長時間かけて調整。一週間の試用というので借り出す。決めかねたが、結局、耳掛型の全自動の機種を購入した。今のところ、テレビが聴きやすくなった程度である。「耳の遠くなった者は長生きをする」という言い伝えがある。せめてそうあって欲しい。

◇ ◇ ◇
※ このお話の続き「続・補聴器物語」は103号(2000年3月)に掲載されています。是非ホームページでご覧になってください。
(編集部)

生徒とのふれあい

谷内純一



追手前高校で女子バレー部の顧問だったときのことです。合宿があり、宿は丸ノ内にある日本式旅館でした。夜10時ごろ私はもう蒲団の中でした。ふすまの向こうでは生徒たちはまだ起きていて話し声が聞こえてきました。一年生ですがしっかりとものSさんが、同級生のUさんに話しかけていました。「Uちゃん、あなたはほんとうに甘えんぼうね。お母さんに頼り過ぎよ。もっとしっかりせんといかんよ。お母さんがいなくなったらどうするの。わたしなんか、お母さんがいなくてもちゃんとやってゆけるよ。・・・」Uさんが「うん、わたしお母さんがいないと何にもできないよ。ううう・・・」
「あれ、Uちゃん、泣いているの。」「わたしお赤さんがいないと何にもできないんだから、お母さんがいなくなったら私どうしよう。ううう。」
「みんなUちゃん泣いてるわ。Uちゃん大丈夫よ。」
そのうちUさんが大声でワアワアと泣き出しました。周囲の友達もよってきて「大丈夫よ。泣かないで。」と口々に。私は可笑しくてたまりませんでした。すぐ隣の部屋な

足摺研修旅行は 何を表現したか

叶岡 哲

32号(1987年)

※以下原文ママ

ながら高退協にごぶさたして気がひけて、それがうっ積して何ともやりきれない気分がうっ積していたところへ「足摺」研修旅行の話がきたので「これだ」と飛びついて参加しました。時期もよし、観光客でごったがえすシーズンははずれた晩秋の十一月八日。こういう旅行のたのしみは「だれに会えるか?」という期待、「何が起るか?」という、一種の「スリル」でしょう。それもあって、列車の時間よりも早めに高知駅へ出かけて駅のレストランに上がってみたところ、案の定、シブさん会長、イツちゃん事務局長、トミちゃん、サキちゃんたちはビールで氣勢を上げている。こど

うもどうも、こりやさきか思いやられるねえ」というあいさつでまずは「研修旅行」のスタートをきりました。車中でも想像通り、ワンカップ、ウイスキー、ビールで談論風発、高知市長選、中曾根内閣論、体験的太平洋戦争史論から、「教育勅語」に集約される教育イデオロギー論、戦後教育史と経済社会構造の変化、「管理職」の精神論、テーマはさらに進んで日本人の精神構造からセックス風俗論にまでおよびました。まさに「どどまるところを知らず、行きつく先を知らず」という「ダッチロール」型シンポジウムというか、途中で眠り込んだ人が窪川あたりで突然とびおきて名論卓説を披露するといった具合で、高退協の面目躍如たるものがあり、周囲のお客さんたちも楽しみながらも少し分学習になったことでしょう。私自身も、いい気になって「討論」に加わりましたが、ずい分参考になりましたし、「やっぱり高退協はマジメじゃねえ」という感を深くしました。(左上へ)

追手前高校は卒業後20年目つまり38歳のときに全学級がいっしょに同窓会を開くという伝統があります。彼女たちが卒業して20年目の同窓会に私も参加しました。Uさんも参加していました。堂々とした姿でした。私はあの合宿でのエピソードを彼女に話しました。すると彼女は「それはわたしではありません。別の人です。」ときっぱりとした態度で言いました。私は驚きました。証人となってくれるはずのSさんは不参加でした。Uさんはそれは私ではありませんと言いましたがそれはだれだれさんのことですかと言いませんでした。彼女はすっかり忘れてしまったのでしょうか。私は不思議でした。私は私の記憶が90%以上正しいと思っていますが、別にそれにこだわる気持ちはありません。Uさんを見て人は成長するということ。私を思い、あのとときの彼女の仲間の友情をあらためて思い出したことでした。